

---

# 雨

忍足香輔

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雨

### 【Nコード】

N4790D

### 【作者名】

忍足香輔

### 【あらすじ】

雨を嫌う少年。その理由がわからない少年は思い悩み続ける。唯一の相談者である姉。その姉は、ひっそりと彼のそばにいるが……

…

「ぼくは考えた」

それは雨が降ってきた夜のこと。ぼくは部屋に一人で机に向かっている。家族はみんな帰ってきているが、物音一つすることはない。時計はもうすぐ明日になろうとしていた。

雨が降っていると、ぼくは檻に閉じ込められたような気分になる。外に出ようとしても、なんとなく気が乗らない。体が濡れてしまうからだろうか？ でもぼくは体が濡れても気にしない。むしろ気持ちがいいくらいだ。今もぼくの体は濡れている。

「じゃあ何故だろう？ ぼくは何故外に出ようとしないのだろう？ 外が暗いからだろうか？ でもぼくは、どちらかというと夜型の人間だ。夜に行動するのが好きだ。それに、昼間の雨でもぼくは同じ感覚を味わう」

ぼくは後ろを振り返った。そこには姉が寝ている。音も立てずに、仰向けで寝ている。

「姉さんはどう思う？」

ぼくの問いかけに答えない。姉は何も答えずに、ただ雨の音が部屋の中に鳴り響いている。

「姉さん、ちよつと起きてくれよ」

それでも姉は目を覚まさない。ぼくは姉にまたがった。そして姉の胸を思いつきり驚掴みにする。

「なんで起きてくれないんだよ？ ぼくの話聞いてくれないんだよ？」

姉の胸の弾力は失われていた。ぼくの力に合わせて返された弾力はもう無い。やわらかく、あたたかかったはずの姉の胸は、いびつによじれ、冷たい。

姉の喉には無骨としか表現しようのない出っ張りがある。ぼくはそれを引き抜いた。

「姉さんはぼくが嫌いになっちゃったのかな？ そんなことないよね。ぼくは姉さんが大好きだもん。すごいすごい大好きだもん。ぼくが大好きなんだから、姉さんだってぼくのこと大好きでしよう？ だって、ぼくは姉さんに包まれているんだから。姉さんがくれたプレゼントに、ぼくは包まれているんだから」

ぼくは何度も何度もナイフを振り下ろした。

「もつとぼくを姉さんで包んで。ぼくは外に出たくないんだよ。雨の日は外に出たくないんだよ。姉さんに包まれるだけで、ぼくは幸せなんだ。はじめて会った夜に言ってくれたじゃないか。ぼくのこと大好きだって。ぼくの言うことを聞いて、くれたじゃないか。叫ぶぐらい必死に、ぼくをお願いしたじゃないか。ぼくに愛して欲しいって」

ぼくは何度も何度もナイフを振り下ろした。何度も何度も何度も何度も何度も何度も。そして、姉はぼくにすべてを見せてくれた。今まで隠していたものを全部見せてくれた。やっと、ぼくにすべてを見せてくれた。

「ああ、姉さん。やっぱり答えてくれた」

ぼくはそれらを抱きしめた。姉が隠していたそれらは、ぼくの全身を姉さんで染めてくれる。ぼくを包み込むのに、十分な量があった。でも……。

「姉さん、なんでこんな冷たいの？ 冷たすぎるよ。まるで雨みたいだ。それに黒いよ。ぼくの好きな色は赤なのに。なんでこんなに黒くなっちゃったの？ なんでみんな最後はぼくに冷たくするの？」  
ぼくは必死で姉に聞いた。目が熱くなり、いくつもいくつも涙がこぼれた。姉はそんなぼくをじっと見つめている。何も言わずにただ見つめるだけ。

姉の顔はきれいで、ぼくは大好きだ。頬をなでると、姉は目からいくつも涙を流して、ぼくに大好きと言ってくれた。何度も繰り返し、ぼくに大好きと言ってくれた。

でも、もう何も言ってくれない。頬をなでても、姉はただぼんや

りとぼくを見るだけ。

「もう、駄目だな」

ぼくはそう呟いた。悲しかった。ぼくは心底悲しかった。

ぼくは隣の部屋に姉を運んだ。姉は見かけによらず重く、力の弱いぼくには重労働だ。だからぼくは何回かに分けて運んだ。今までそうしてきたように。何度も往復しないといけなかったが、さすがにもう慣れてきた。

ぼくは姉が寂しくないように、みんなと同じ部屋に運んであげた。一人ぼつちは寂しいだろうから。

ぼくは最後に姉の頭を運んであげた。その頭を、ぼくは本棚に並べる。ぼくの姉さんたちが、ぼくを見ていた。

「ぼくの新しい姉さんだよ。仲良くしてあげてね」

ぼくはそう言つて、みんなの頬をなでてあげた。髪を櫛で梳かしてあげた。姉さんたちはいろんな化粧をするから困っている。ぼくはそのままが一番なのに、そう言っているけど、姉さんたちは化粧を止めようとしなない。ぼくでも知っている。きつとおしろいをつけているんだね。みんなどんどん顔を白く染めたがる。きつと流行っているんだなとぼくは思う。だって、みんな同じ化粧をするんだから。きつとこの姉も、みんなに影響されちゃうだろうな。少しづつ、少しづつ白く染めていくのだろう。

ぼくは姉さんたちの髪を梳き終わると、ゆっくりと扉を閉めた。

「じゃあぼくは行くね。また新しい姉さんを連れてくるよ。新しい姉さんとも仲良くして欲しいな。きつとここに連れてくるから」

ぼくは玄関に行き、靴を履いた。相変わらず、外は雨が降っている。ぼくは雨が嫌いなのに……。

「そうか」

ぼくは気付いた。なんでぼくは雨の日に外に出たくないのかが。姉さんが流れ落ちてしまうからだね。せっかく姉さんに包まれて

も、雨がぼくと姉さんを引き剥がすんだ」

ぼくは暗い道を歩き始めた。冷たい雨が頭から、顔から、手から、足から姉さんを引き剥がす。

姉さん、姉さん、姉さん・・・・・・・・・・

ぼくに、雨は容赦なく降り続く。

いつまでも、いつまでも

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4790d/>

---

雨

2010年10月8日15時07分発行